

## 『フィラスター』 (2) : フランシス・ボーモン ト、ジョン・フレッチャー

太田, 一昭  
九州大学大学院言語文化研究院

國崎, 倫  
九州国際大学 : 准教授

棚町, 温  
福岡大学 : 講師

<https://doi.org/10.15017/4773113>

---

出版情報 : 言語文化論究. 48, pp.85-106, 2022-03-17. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

## 『フィラスター』(2)

フランシス・ボーモント、ジョン・フレッチャー

太田 一昭、國崎 倫、棚町 温(訳)

### 2幕4場

ディオンの、クレアモント、スラサライン、メグラ、ガラティア登場。

ディオンの さあ、皆さん、しばらく話をしませんか？

夕食のあとに男性が一マイル歩くように、ご婦人がたは  
一時間おしゃべりをなさる。それが皆さんの運動というわけです。

ガラティア もう遅いですわ。

メグラ 私はもう臉が重くなってしまって、ベッドへ行くだけで精一杯です。

ガラティア [傍白] 臉がそんなに重くなっておいででしたら、  
今夜はご自分の部屋に戻るのも無理でしょうね。

ファラモンド登場。

スラサライン 殿下です。

ファラモンド ご婦人がたは、まだ起きておられるのか？ 皆さん夜更かしがお好きだ！

眠って朝まで楽しい夢をみたいとはお考えにならないのかな？

メグラ 殿下、私は夢をみるより楽しく起きているほうが好きですわ。

アレスーザとベラーリオ登場。

アレスーザ まあ殿下、こちらのお嬢様がたを誘っていらっしゃるのですか。

もう遅いのではございませんか、皆様。

クレアモント その通りでございます。

アレスーザ [ベラーリオに] あなたは向こうで待っていてちょうだい。 (退場)

メグラ この女は疑っている、間違いない！ [ファラモンドに] お気をつけになって、殿下、  
姫はヒュラスやアドーニスのような美少年をお抱えになっています。

ファラモンド あの少年の姿は天使のようだ。

メグラ だって、あなた様が結婚なさったら、あの子が若いアポロンのように  
あなた様の枕の横に座って、その手と声であなた様を眠らせてくれるのです。

姫はあなた様とご自身のためにあの子をお傍においておられるのです。

ファラモンド 私はああいう少年たちに魅力は感じない。

メグラ 私もですわ。あの子たちって役立たずなんです。

おまけにつまらないお遊びを隠す知恵也没有ありません。

ディオンの少年は姫君にお仕えしているのか？

スラサライン そうだ。

ディオンのかわいい小姓だ。ほんとうに綺麗に着飾らせていらっしゃる！

ファラモンド ご婦人がた、ゆっくりお休みなさい。明朝私は

鹿狩りに行きます、皆さんがまだ夢を見ているときに。

メグラ 殿下、おやすみなさい。 [ファラモンド退場]

殿がたも、おやすみなさいまし。さあ、私たちも休みましょうか？

ガラティア ええ、皆様、おやすみなさいませ。

ディオンの皆さん、よい夢をご覧になりますように。

ガラティアとメグラ退場。

さあ、われわれはどうしよう？ もう夜も遅い。国王は

まだ起きていらっしゃるぞ。ほら、こっちに来られる、警護の者をつれて。

国王、アレスーザ、護衛登場。

国王 そなたの情報は確かだろうな。

アレスーザ 命にかけて真実でございます。

あの男は、私に求婚しているさなかに私を放り出し

別の女に手を出しております。陛下は私をそのような男に

お妻わせになることはないだろうと思っております。

ディオンの [傍白] これはいったいどういうことだ？

国王 それが事実であれば、その女は生きているより不治の病に

かかったほうが身のためだ。そなたは休むがよい。

そなたの受けた不当な仕打ちは正してやる。 (アレスーザとベラーリオ退場)

みんな、こっちへ。そなたたちの力を借りたい。

ファラモンド殿下はご自分の部屋に戻られたか？

ディオンの 部屋にお入りになるのを見ました。

国王 誰か急いでメグラの部屋に行き、そこにいるのか

調べてきてくれ。(ディオンの退場)

クレアモント メグラはたった今、他のご婦人がたと別れてここから出て行きました。

国王 もし女が自分の部屋にいれば

われわれの疑いをいたずらに知らせる必要はあるまい。

[傍白] ああ神々よ、私には分かっている、

他人の富や高い地位を不当に奪った人間には必ず呪いがかかり、

卑しい人間が享受する幸福に与ることはないのだ。  
 後世に知れることになろう、その男に  
 男子の世継ぎは残っていないと。男の名は  
 この世から消えてしまうのだ。男に娘がいたとしても  
 不幸な結婚しかできないだろう。神々の思し召しによって  
 妻と夫との間に激しい不和の種が蒔かれるのだ。  
 しかし、それが神々のご意志であるとしても、  
 私の犯した罪をお許してください。罪のないわが子を  
 罰するのはどうかおやめください。しかし私は  
 不当に奪った国を手放すことなく、その大地でこうして祈っている。  
 公正な神々が私の願いをお聞き入れくださるはずはない。

ディオオン登場。

ディオオン 陛下、聞いてまいりました。メグラの侍女たちは、主人は部屋の中にいると言っております。連中が女郎屋の女将と変わらぬというのは分かっております。メグラとどうしても話さねばならぬのだと申しましたら、女たちは笑って、メグラ様は黙って寝ていらっしゃると言いました。私が大切な用事があるのだと申しますと、メグラ様も大切な仕事の最中だと言うのです。私は腹がたつてきまして、自分の用件は生死に関わる重大事なのだと言いました。すると女たちは、寝るのも同じく大事ですし、メグラ様はいまその大切なことをなさっていると言います。あの女とはさっき別れたばかりで、もう眠っているなんてありえぬと私が申しますと、連中はまた笑って、横になって目を閉じていれば眠っているのではございませぬかと言いたいようでありました。それ以上ははっきりとした答えを聞くことはできませんでした。つまり、女は部屋にいないと思えます。

国王 ならば、ぐずぐずしてはおれぬ。衛兵たち、  
 ファラモンドの部屋の裏口で見張っておれ。  
 いいか、お前たちの命にかけて一人もそこから出してはならぬ。〔護衛退場〕  
 叩け、さあみんな、強く叩け。もっと強く。〔ディオオンとクレアモントがドアを叩く〕  
 ええっ、お戯れのせいで耳が聞こえなくなっているのか？  
 黙々とお楽しみのようなのだが、そうはさせぬぞ。もっと叩け。  
 まだ出てこないのか？ 若殿が眠っているとは思わぬ、  
 女が傍にいては眠れぬはずだ。もう一度叩け。ファラモンド！ 殿下！

ファラモンド、バルコニーに登場。

ファラモンド こんな真夜中にドアを叩く無礼なやつは誰だ？  
 見張りはどこにいる？ おれの怒れる魂にかけて、  
 こんな無礼を働くやつは生かしてはおかぬ。  
 国王 ファラモンド殿、あなたは思い違いをなさっている、われわれは味方だ。  
 降りてこられよ。

ファラモンド 国王陛下？

国王 そう、私だ。降りて来られよ。

あなたに火急の用があって参上した。

ファラモンド、一階に登場。

ファラモンド ご用がおありであれば、陛下のお部屋に伺います。

国王 いや、夜も遅い。失礼してあなたのところで話をさせてもらおう。

ファラモンド 内密の事情がございまして、

恐れながら陛下を中にお入れするわけにはいきません。

だめです、中に入っははいけません。命にかえても

お通しするわけにはいきません。

国王 いや殿下、どうしても入らせていただく、入らねばならん。行け！

ファラモンド この屈辱、許さぬぞ。

中に入る者は、命はないと思え。陛下、このような遅い時間に

この反逆者たちを私の部屋に連れていらっしゃるとは、

私を他人扱いなさっははいないという証なのです。

国王 なぜそのように苛立っておられるのか？

あなたは不当に扱われているわけではない、そんなことはさせぬ。

ただあなたの部屋を改めさせていただく、

そうせねばならぬ理由があるのだ。さ、中に入れ。

ファラモンド なりません。

二階にメグラ登場。

メグラ 皆様を中にお入れ下さい、殿下、お入れになって。

私は起きて用意はできております。この人たちの用件は分かっています。

哀れな女を辱めようとやっきになっているのです。好きにさせておきましょう。

皆様、ご用がおありなのでしょう。私はここにおります。

ああ国王陛下、高貴な方のなさることではございませんわ、

女の弱さを見世物になさるなんて。

国王 降りて来るのだ。

メグラ 降りて行きますわ、陛下。あなた様の騒々しい非難も、

ひそひそ声の陰口も、そして露骨な嘲笑も、

この見苦しいお振舞いと同じく、私の気に障ることはございません。

しかし、私はある方に対して復讐を用意しております。

その復讐を、陛下がこの上なく蔑まれる私の

喜びと滋養にいたしましょう。

国王 降りて来るのか？

メグラ ええ、あなた様のひどい仕打ちを笑うために。でも、私のやり方が

うまく行けば、あなた様はきっと苦しむことにおなりでしょう。[二階から退場]  
 国王 [ファラモンドに] 殿下、あなたのふしだらに強く苦言を  
 申さねばならぬ。あなたは立派な婦人に不当な仕打ちをした。  
 だがそれ以上は申すまい。殿下を私の部屋にお連れしろ、休んでいただくのだ。

[ファラモンドと護衛退場]

クレアモント 殿下には別の女を見つけてベッドにお連れせねばなるまい。  
 ディオン 奇妙な話だ、公式の許可がなければ息抜きもできないとは。  
 こういう馬鹿なことが続いて部屋が搜索されることになれば、  
 妻とも安心して同衾できなくなってしまう、  
 国家の計略によって誤解されるかもしれないからな。

メグラ、護衛と登場。

国王 さて、ご立派な侍女殿、お前の貞節は今どこにあるのか？  
 あの若殿でなければお前の口には合わぬというわけだな？  
 その腐った性根は下手な偽装では隠せぬ、  
 化粧と薬でつくった女よ、騒然たる情欲の海よ、  
 放埒な思いの宿る荒ぶる野獣よ、病に感染し膨れ上がった腫脹よ、  
 あらゆる病の爛熟した源よ、お前はすべての罪、すべての地獄、  
 そしてとどのつまり、すべての悪魔だ！  
 お前は、その慇懃な物腰で誘惑する相手が他にいなかったのか？  
 こともあろうにお前はわが婿となるはずの人を誘い、娘を侮辱した。  
 天上の神々に誓って、ここにいるすべての貴族、すべての小姓、  
 そして宮廷の全員が宮廷の至るところでお前を嘲り、  
 腐ったオレンジを投げつけ、下品な歌をつくり、  
 ろうそくの煤で壁にお前の名を書くのだ。  
 笑っているのか、愛の貴婦人殿？

メグラ 陛下、申し訳ございませんが、そのようなお戯れをなさるのを拝見して、  
 笑い申し上げることしかできません。陛下がそのようなことをなされば――  
 いえ、よもやそんな勇気がおありとも思えませんが――  
 陛下がいまお誓いになった神様に加えて、  
 私の信じる同じくいたくさんの神様に誓って  
 私は仲間を道連れにいたします、同じ罪を犯した仲間ですわ。  
 きっと高貴な方が笑いの種になるでしょう。  
 王女様のお名前が私の名前と並んで壁に落書きされ、  
 あるいは小唄に歌われるでしょう。  
 これ以上私を刺激しないほうがよろしゅうございますわ。私は王女様のご事情も、  
 どこにしげしげと通われているかも存じております。  
 隠れ家も、お楽しみごとも、密会の場所もすっかり晒してさしあげましょう。  
 いえ、王女様を辱めてやりましょう。王女様が小姓をかかえておられるのを

私は存じております。十八歳くらいの美しい少年です。  
 王女様がその少年と何をしているか、場所も時間も存じております。  
 ああ陛下、あなた様は女の怒りに火をつけてしまったのです、  
 復讐の女神の荣誉ともいうべき怒りに。

これで私が恨みを存分に晴らさないとしたら——

国王 この女が騒ぎたてている小姓は何者だ？

メグラ まあ、陛下はほんとうにお人好し、こういう世事には疎くていらっしゃる。

私はご行状を暴きたくはございません。この過ちは伏せておいてくださいませ。

陛下ご自身の健康と同じで、腐った人間の熱気に曝してはいけないのです、

さもなければ天に誓って、私は一人で墮ちるつもりはございません。

私の存じ上げている情報を世に知らしめてさしあげましょう、一枚刷りの小唄のように。

みんなが自分の母語を話すように、自由にいつでもその噂話をするようになるでしょう。

私はその話を、誰もが仰ぎ見る不吉な星のように掲げましょう、

それは高く天空に輝くので、はるか遠くの異国でも読みとることができるのです。

いえ、人々はそれを連れ合いとして旅をするのです。その旅は噂話をする人が

いなくなるまで続きます。そうして誰もが、美しい王女様の転落を見知ることになるのです。

国王 姫は、小姓をかかえているのか？

クレアモント 恐れながら、陛下、小姓が姫君にお仕えしているのを

見たことがございます、美しい少年でした。

国王 行け、自分の部屋に戻れ。今度だけはお前の不始末は忘れてやる。

メグラ 陛下が私を忘れてくださるのでしたら、

私も陛下を忘れるよう努めますわ。（国王、メグラ、護衛退場）

クレアモント なるほど、ヘラクレスにふさわしい男勝りの女だ！もし女の九英傑がいたら、この女は馬にまたがり隊長になるだろう。

ディオンの間違い、あの女の舌には悪魔の守備隊が陣どっていて、猛烈な炎の弾丸を吐き出したのだ。激しい言葉の棘で国王を刺してしまったので、国中の医者をもってしてもその傷をいやすことはできないだろう。あの小姓は、メグラの病を治す、思いがけなく見つかった解毒剤だった。あの少年、あの姫君の小姓、あのすばらしい純潔で淑徳の姫君の小姓、美しい少年、洗練された言葉遣いの少年——あれこれ考え合わせるとそれ以外にはありえないのだが——みんな、私はここで失礼する。

スラサライン いえ、われわれも同道させていただく。（一同退場）

### 3幕1場

クレアモント、ディオンの、スラサライン登場。

クレアモント いや、間違いはない、噂はほんとうだ。

ディオンの そう、神々が国王を懲らしめるためにこの罰をくださったのだ、

王自身の娘を使って。若者の鑑ともいうべきフィラスター様が冷淡な国王によって

圧迫を加えられて王権を奪われている。この国で貴族として処遇され、自由な人間であるはずのわれわれが、それを座視しているとなれば恥ではないのか？ 王笏が好色婦人の手に渡ろうとしているのを黙って見ているつもりか？

姫君はまだ髭もはえぬ口先上手の少年との情事にうつつを抜かしている。そして今度は異国のよそ者と結婚しようとしている。その男を国民は王子と認めているが、そうでなければ生れながらの奴隷だ。もっとも高貴であるはずの心が卑しいのだ。

スラサライン フィラスター様をお助けするためにあなたとともに決起しない者は、神々が目をかけてくださることもない、この世に生きる資格はない人間なのだ。

クレアモント フィラスター様ご自身は、ためらっておられる。

貴族たちはその時を心待ちにしている。民衆はいつもとは異なり、みんないっせいにフィラスター様の味方をしている。

まるで畑の小麦が強風にあおられて

まっすぐに伸びた莖の先端の穂を一方になびかせているようだ。

ディオンの フィラスター様をためらわせている唯一の理由は

美しい姫君の愛だ。フィラスター様はその愛に驚き心を動かされておられるが、われわれが姫の愛は偽物だと訴えればよい。

スラサライン フィラスター様は信じないかもしれない。

ディオンの いや、疑いなく事実なのだ。

クレアモント そう、疑問の余地はない。姫はふしだらな生活しているのだ。

しかしフィラスター様は、お疑いになっていろいろお尋ねになるかもしれない。

そのときはどのように説得すれば、殿下の信念を変えさせられるだろうか？

スラサライン われらはみな確信していると言えばよい。

ディオンの それが真実であり、フィラスター様ご自身のためになるのだから、

私はこの話を知っていることにしよう。知っていると言おう、

いや、この目で見たと断言しよう。

クレアモント それがいちばんいいだろう。

スラサライン フィラスター様は驚かれるだろうな。

ディオンの いらっしゃったぞ。殿下、おはようございます。

ちょうど殿下をお探ししておりました。

フィラスター やあ、君たちか。

君たちは不遇の友を忘れぬ心をもっている、

美德ゆえに辱めをうける人間に眉を顰めたりはしない。

君たちみんなに幸いが訪れますように。

私は君たちのためにどうすればよいだろう、

その厚情にふさわしい何かができればよいのだが？

ディオンの われわれは、殿下の気高いお心に訴えるために参上しました。

さあ行動を起こすのです、兵を挙げるのです。

貴族も民衆もみなこの僭王のために生气を失っております。

美德という言葉聞いたことがあり、美德が何であるかを知る者はだれでも、



殿下の企てを支援するでしょう。

フィラスター 私に対する君たちの好意は、まことに立派だ。

私はその好意を受けるに値しないのだが。ああ、君たちがこの世に生をうけたのは、溢れんばかりの恭順の意を表して私に恥をかかせるためであったのか。私はありがたいと思うと涙が出てくるたちなのだ。しかし私の企てはまだ機が熟していない。

やがて君らの好意を必要とする時がくるだろう。今はそれで納得してほしい。

私にもやりたいことはある、しかしまだその時ではないのだ。

ディオ 殿下のお考え以上にその時は満ちております。

将来は手が届かなくなるかもしれないものが

いま力に訴えれば簡単に手に入ります。国王が

民衆にずっと嫌われているのはご存じでありましょう。

それに姫は、かつては民衆に愛されておりましたが、今は――

フィラスター なに、姫がどうかしたのか？

ディオ 国王と同じくひどく嫌われおります。

フィラスター わけがわからぬ、なぜだ？

ディオ 売女という評判でございます。

フィラスター 嘘だ！

ディオ 殿下――

フィラスター 嘘だ！（剣を抜こうとするが、とめられる。）

思い知らせてやる！お前の心は高潔だと思っていた。

このように婦人の名誉を奪うのは、

疫病のようにおぞましい罪だ、断じて許せぬ。

まったくの濡れ衣でも、噂の種が民衆の間にまかれてしまうと

汚名を晴らすのは不可能だ。民衆は悪疫を蔓延させるのが大好きで、

耳にした悪い噂をどんどん広めていく。

放してくれ、欺瞞の芽が出てきたらすぐに切り取らねばならぬのだ。

そのような中傷を口にすると私と私の間にどれほど高い山があろうとも

私は山をのぼり、その山頂から男の首に襲いかかるだろう、

雲から放たれる雷のように。

ディオ これはじつに奇妙だ。

間違いない、殿下は姫を愛しておられる。

フィラスター 私は美しい貞淑な女性を愛している。

姫は私の愛する人だ、姫を誹謗する者は

誰であろうと私が天罰を加えてやる。ええい、この手を放せ！

スラサライン いいえ放しませぬ、どうか気をお静めください。

クレアモント 殿下、忘れてはいけません、この男はあなた様の立派な味方です。

自分の務めをはたすために参じているのです。なぜそのように言うのかを説明してくれましょう。

フィラスター 許してくれ、ディオ。

真実への熱意のために取り乱してしまった。

もし君のいないところで嘘をならべたてて君が謗られるのを聞いたならば  
いまと同じように取り乱し、激怒していただろう。

ディオーン しかし殿下、これはほんとうでございます。

フィラスター ああ、それは嘘だ、事実ではないと言ってくれ。

事実ならば、女性はみんな不実ということになってしまう。

それ以上言うてはならぬ、とうていありえぬ。

なぜ姫がふしだらだと思うのだ？

ディオーン 実はその現場を押さえられたのです。

フィラスター 嘘だ、天に誓って嘘だ！ そんなことがあるものか、

あるはずがない、そうだろう？ なぜ黙っている、お願いだ、言ってくれ。

そんなことがあるだろうか？ 女はみんな地獄落ちになると言うのか？

ディオーン いえ、殿下。

フィラスター では、ありえないのだな。

ディオーン いえ、姫が少年と親しくしておられるところを見た者がいるのです。

フィラスター どんな少年だ？

ディオーン 小姓です、姫に仕えております。

フィラスター ああ、まさか——小柄な少年か？

ディオーン そうです。ご存じなのですか、殿下？

フィラスター [傍白] あの少年が忌まわしい罪をすでに知っているのか！

[ディオーンに] 君は思い違いをしている。少し冷静に筋道をたてて説明しよう。

もし姫が好色であれば、まだ情欲を知らないただの少年を

相手にするだろうか？ 自分がどういう罪をおかすのかをよく知っていて、  
姫の思いにこたえられる男を選ぶだろう。

そういう罪をおかすのは、邪悪な人間の大きな喜びなのだ。

君は騙されている、姫も、そして私もそうだ。

ディオーン どういう意味でございましょうか、殿下？

フィラスター もちろん、世の人々はみんな、讒言に欺かれているのだ。

ディオーン ああ、殿下、あなた様はご自身が高潔でいらっしゃるために

女の狡猾な考えが見抜けないのです。

つまり、殿下、私は現場を見たのです、この眼で。

フィラスター では、お前が見たのは悪魔だ！

[ディオーンに] 消えろ、おれは怒りで何をするかわからぬぞ！

お前が見たのが二人ではなく、疫病を引き起こす悪魔であればよかったのだ。

おれの眼の届かぬところに身を隠せ！ お前は二人を見たときに、

雷に胸をうたれていればよかったのだ。永遠に口がきけなくなっていれば

よかったのだ。そうすれば、このおぞましい行為は誰にも知られず、

しずかに眠っていただろう。

スラサライン [クレアモントに] 殿下がこれほどに取り乱したのを見たことがあるか？

クレアモント [スラサラインに] 一度もない。

フィラスター 大地の四隅から吹く風は陸と海のいたるところに広がるが、その風の吹くところに貞節な女は一人もいない。

剣でおれを突き刺してくれる友はいないのか？

ディオソ 殿下、この知らせになぜそこまで憤っていらっしゃるのですか？

フィラスター 美德が転落すると、おれはひどく取り乱してしまう、それはおれにとって一大事なのだ。

ディオソ しかし殿下、どうかご自身を取り戻して何をするのが最善であるかお考えください。

フィラスター わかった、そうしよう。

よければ私を一人にしてくれないか、慎重に考えてみたい。

明日君のいるところに行って答えるでしょう。

ディオソ 神々のお導きにより、あなた様が最善の道をお選びになりますように。

スラサライン [クレアモントに] 殿下はひどく気が動転しておられた。

クレアモント [スラサラインに] それは殿下の美德と高潔なお心のせいだ。

(ディオソ、クレアモント、スラサライン退場)

フィラスター ディオソにどこで二人を見たのか尋ねるのを忘れていた。

あの男を追いかけよう。ああ、この心を焼く怒りの炎を消してくれる海原の水が胸の内であればよいのに！ 状況を知ればその炎が煽られて

大きくなるだけだ。ただその行為が行われたというよりも、それを誰が行ったのかを知って、苦しみがいっそう募る。

それに、これを私に話してくれた男は高潔の士で嘘はつかぬ。

だとすれば、あの女は純潔ではないのだ。

ああ、獣になりたい、そうすれば目に見えないものに苦しめられることもあるまい。

雄牛や雄羊は、目の前にいる雌を自分のものにしておこうと争う、しかし雌の姿が見えなくなれば、雄の興奮もすぐに消えてしまう。

そうしてまた牧草をがつつと食い、元気になって肥え太り、

泉の水を以前と同じくおいしく飲むのだ。眠っているときに不意にびくっと身を震わせることもない。しかし惨めな人間は――

ベラーリオ登場。

ああ、神々よ、ご照覧あれ、あの少年はまだ何ごともなく歩いている。

あなた方が授けたその表情は、無垢であったときと変わらず、

天罰によって損なわれてもいない。これが正義なのか？

人間を欺くために、裏切りが穏やかな顔をするのを

神々はお許しになるのか？ ああ、あれが罪を犯しているとはどうしても思えぬ。

ベラーリオ ごきげんよう、殿下。王女様から心からの愛と命を、

そしてこのお手紙をお届けするよう仰せつかりました。(手紙を渡す)

フィラスター あ、ベラーリオ、もう分かるぞ、姫が私を愛していることが。

それを示すために姫はお前を愛しているのだ。

姫はお前を立派にしてくださったな。

ベラーリオ 殿下、姫君は私が望む以上に着飾らせてくださいました、私にはそんな値打ちはございません。姫君のお供にふさわしい衣装でしょうが、召使いとしてお仕えしている私にはまったく不釣り合いでございます。

フィラスター お前は宮廷人らしくなったな。[傍白] ああ、悪行を愛する女たちはみんなここで偽り方を学んだらよい、この手紙で。

手紙にはこう書いてある——姫の心は全世界に対しては金剛石のように堅固だが、しかし私に対しては初雪のようで、一目で溶けてしまう——

[ベラーリオに] さ、聞かせてくれ、姫はお前をどんなふうに使っているのだ？

それによって姫が私をどれほど愛しているかを推測できるだろう。

ベラーリオ 召使いではなく、まるで姫君のお身内であるかのように、あるいは私の忠勤のおかげで命が三度助かったかのように、あるいは母親が一人息子を溺愛するように私を大切にしてくださいます。また私が姫に世話を任せられた子どもで、私に何か災いが降りかかれば姫ご自身の命で償わなければならないかのように、私を大事に使ってくださいます。

フィラスター ほう、それは実にすばらしい。

で、姫はお前にどんな親切な言葉をかけてくれるのだ？

ベラーリオ 姫君は私が初々しいから信用するとおっしゃり、ご自分の愛の秘密をすっかり打ち明けられて、私をかわいい従者と呼んでくださり、殿下のもとを離れたからといってこれ以上泣いてはいけないと申されました。姫君は私の務めに十分報いてくださるおつもりです。そのような優しい言葉をかけてくださいますので、話し始められたときよりも話し終わられたときのほうがよけいに泣きたくくなります。

フィラスター それはますます大いに結構だ。

ベラーリオ どこか具合がお悪いのですか、殿下？

フィラスター 具合が悪い？ いや、どこも悪くないぞ、ベラーリオ。

ベラーリオ あなた様がお話になるお言葉はあまり冷静でないような気がいたします、またご表情からは、いつもお見受けしていた平静さが消えてしまっておいでのようです。

フィラスター いやそれはお前の勘違いだ。

で、姫はお前の頭を撫でてくれるのか？

ベラーリオ はい。

フィラスター それから、両頬を撫でてくれるのか？

ベラーリオ はい、殿下。

フィラスター そしてキスをしてくれるのか？ そうだろう？

ベラーリオ どうなさったのですか、殿下？

フィラスター キスをしてくれるのかと聞いているんだ？

ベラーリオ 一度もごいません、殿下、天にかけて。

フィラスター それはおかしい、お前にキスをしているのを知っているのだ。

ベラーリオ 嘘です、命にかけて！

フィラスター じゃあ、姫はおれを愛していないのだな。いや、そんなことはない。

おれがそうするよう言ったのだ。二人の愛の魔力にかけて、

われわれが抱く平和の希望にかけて姫に命じたのだ。

閨の喜びを残らず、裸で、お前に与えるようにと。

おれが誓わせたのだ、お前を楽しませてやれと。

さあ、聞かせてくれ、極上の女なんだろう？

あの女の吐息は、果実が熟したときのアラビアの風のように

かぐわしくないか？ 両胸は、二つの透きとおった象牙の球のようではないか？

尽きることのない喜びを与えてくれる女ではないのか？

ベラーリオ ああ、いま分かりました、胸騒ぎがして

心が千々に乱れておりましたそのわけが。姫君のもとに参ったとき

不吉な予感がございました。殿下は騙されていらっしゃる。

悪党があなた様を騙しているのです。殿下が何を考えていらっしゃるか、

私には分かります。そのような偽りを殿下に吹き込んだ男は、

頭上に岩が降りかかり砕かれてしまえばよいのです。

殿下の高貴なお心を狂わせてしまおうと、何か巧妙な罠が

仕掛けられているのです。

フィラスター お前はおれが怒ると思っているな。いいか、

おれの計画をすべて教えてやる。おれは幸福を愛する以上に

あの女を憎んでいる。それでお前を小姓として送り込んだのだ、

あいつの行動を両の目でしっかり探ってもらうために。何か見つけたか？

あの女、欲望に溺れてしまっただろう？ それをおれは望んでいたわけだが、

さ、何か話しておれを慰めてくれ。

ベラーリオ 殿下、あなた様はご自分が遣わした小姓を誤解なさっています。

たとえ姫君が雀や山羊のような情欲を抱かれたとしても、

たとえ欲望の悪名が届かぬところで世間に隠れて

そのような罪を犯そうとなさったとしても、

私が情欲の手助けをすることは決してごいません。

また姫君にお仕えする身として私が見聞きしたことを

他言するつもりもごいません、たとえ命を失うことになりましようとも。

フィラスター ああ、胸が張り裂けそうだ！

そんな話は薬にもならん、いや、病気そのものよりひどい薬で

苦痛を募らせるだけだ。さ、お前の考えを話せ。お前の胸中にある

どんな些細なことでも聞かせてもらおうぞ。話さぬとなれば、

その胸を引き裂いて調べるまでだ。いまお前の顔を見ているように

はっきりと、お前が何を考えているかを見せてもらう。

ベラーリオ では、そのようになさってください。

姫君は私の知る限り、天上の神々に誓って氷のように貞節です。

しかしたとえ姫君が地獄のような邪淫に耽っておられて、そして私がそれを知っていたとしても、他言はしません。国王が命じようとも、  
 剣の切っ先を突きつけられようとも、拷問にかけられようとも、  
 真鍮の雄牛の中で焼かれようとも、私が口を割ることは断じてありません。

フィラスター それなら、お前とふざけている暇はない、  
 命をもらうぞ、おれはお前が憎い。

いまお前に呪いをかけたいぐらいだ。

ベラーリオ もし憎んでおいででしたら、それより恐ろしい呪いはございません。  
 神々が私を罰するおつもりだとしても、あなた様の憎しみ以上に  
 残忍な刑罰はございません。

フィラスター ええい、この若さで、ここまで白を切るのか！

さあ言え、いつどこであの女と楽しんだのだ。あくまで白を切るつもりなら、  
 生かしてはおかぬ、たとえば疫病がこの身に降りかかろうとも。(フィラスター剣を抜く)

ベラーリオ 天に誓って、私は何もしておりません。命が惜しくて  
 私が嘘をつくようでしたら、願わくは忌み嫌われ長生きしますように。  
 私をばらばらに切り刻んでください。意識あるうちは  
 あなた様が切り刻んだかけらを生きていたときよりも  
 愛おしく思い、ばらばらの四肢にキスをするでしょう、  
 なぜなら、あなた様に切断されたのですから。

フィラスター お前は死が怖くないのか？

子どもは死をなんとも思わぬのか？

ベラーリオ ああ、男の鑑ともいべき人が

このように激情に囚われて理性を失っているのを見て、  
 大人になるまで生きていたいと願う子どもがいるでしょうか？

フィラスター ああ、しかしお前は、死がどんなものか知らぬのだ。

ベラーリオ いいえ、知っております、殿下。

この世に生まれるよりは容易いことです。永遠の眠りです、  
 すべての嫉妬から解放される安らかな休息であり、  
 誰もが求めるものです。また私は承知しております、  
 死は、負けると分かっている試合をやめるようなものだ。

フィラスター しかし、この嘘つきめが、誓いを破った魂には  
 苦しい罰が待っているのだぞ。その罰を考えてみる、  
 そうすればお前の心は怖気づいて、すべて白状したくなるろう。

ベラーリオ 私が嘘をつくか、あるいは殿下がお疑いになっている  
 邪心を私が抱いたことが一度でもありましたら、  
 私は生きているうちに喜んでその罰を受けます。

もし私が不実であれば、殿下がおっしゃっている

その罰を私に受けさせてください。私を殺してください。

フィラスター ああ、おれはどうすればよいのか？

いったい誰がこの子を嘘つきだと言えるだろうか？ こいつは真剣に天に誓って否定してる。もしそれが虚偽であれば、神々は決してお許しにならないだろう。立て、ベラーリオ。  
 お前の弁明は痛切に響く。しかも無実を訴える表情は誠実でとても嘘をついているようには見えぬ。だから、  
 お前の話は嘘だと分かっている、そもそもおれが望んだことだ、これ以上お前を問いつめることはできぬ。お前はおれに不当な仕打ちをした責めを負うべきだったが、お前を責めることはできぬ。おれはお前の正直な表情を愛せずにはおれぬのだ。それに、お前のようないたいけな子どもに復讐することはできぬ。お前に対する愛はお前が何をしようと、揺らぐものではない。お前に似つかわしい血色の良さを両の頬から奪ってしまったのだと思うとおれの心は痛む。しかし、お願いだ、おれの前に二度と現れないでほしい。お前を見ると何か不可解なことが起こって、この心は乱れ、狂気に駆りたてられてしまう。おれを大切に思ってくれるのなら、おれの前から消えてくれ。

ベラーリオ 気高い心のあなた様にご不快にならぬように、私は朝のつづくかぎり遠くまで走りつづけます。しかし私には見えます、希望のないお別れに流すこの涙の向こうに、あなた様と姫君、そして私になされた酷い裏切りが。今生のお別れでございます。私が悲しみのゆえに死んだとお聞きになり、そのあとで私が忠実な僕であったことがお分かりになりましたら、私を思い出して一滴の涙をお流しください、それだけで、私はきっと安らかに眠ることができましょう。(退場)

フィラスター お前がどんな罪を犯してしようとも、天のご加護がありますように。ああ、どこに行けばこの体を洗い清めることができるのだ？ 自然は乱れた心を静める薬を与えてくれない、あまりにも冷酷だ！ (退場)

### 3幕2場

アレスーザ登場。

アレスーザ なぜあの子は戻ってこないのかしら。  
 私には分かっている、私の愛する人はあの子に、私がどのように眠り、歩き、話したのか、あの子の名前をさっき聞いた時にどのようにあの子を思い出したか、私がいつ、どのようにため息をつき、泣き、歌をうたったかを

何度もくりかえし尋ねているのだ。そうでなければ、私はきっとあの子の帰りが遅いと怒っているでしょう。

国王登場。

国王 ほう、瞑想していたのか？ 誰かお付きはいるのか？

アレスーザ 私一人でございます。警護は必要ありません。

何も悪いことはしておりませんし、恐れる者もおりません。

国王 ところで、お前は少年を抱えているのか？

アレスーザ はい、抱えております。

国王 どんな少年だ？

アレスーザ 小姓です、側仕えをしております。

国王 美しい少年か？

アレスーザ 醜いとは思いません。

才芸に優れており、忠実に仕えております。

美しいから抱えたのではございません。

国王 その子は喋って、歌って、遊ぶのか？

アレスーザ そうです。

国王 十八歳ぐらいか？

アレスーザ 歳を聞いたことはございません。

国王 よく仕えてくれるのか？

アレスーザ 失礼ですが、なぜそのようなことをお尋ねになるのですか？

国王 その小姓に暇を出せ。

アレスーザ え？

国王 首にせよと言っているのだ。そいつはお前に、

口に出すのも汚らわしい、ご立派な勤めをしてくれた。

アレスーザ おっしゃっている意味が分かりません。

国王 もし私を畏れるのであれば、忠義を尽くせ。

あの小姓に暇を出すのだ。

アレスーザ その訳をお話してください、陛下、そうすればご命令に従います。

国王 そんなことを聞いて恥ずかしくないのか？

やつを追い出せ、さもなければお前を追い出す。

お前の恥はわが恥だ。お前はあまりにも近い血族であるがゆえ

お前の所業はわが所業、それを口に出すことは死んでもできぬ。

アレスーザ 私がいったい何をしたのでしょうか？

国王 みんなが学びたがる、新しい言葉のようなものだ。

民衆はすでにその覚えたてのことばをたくみに話している。

連中は文法など要らぬ。自分の胸に聞いてみろ、

汚らわしい噂が囁かれている。やつを放りだせ、



すぐにだ。そうしろ、分かったな。(退場)  
 アレスーザ 乙女がふしだらな女と謗られることなく安心して自由に暮らせる場所があるのだろうか？ 生きている人間が相手では無理だわ。世の人々は風評、誤解、夢風に食いついてそれを真実だと思い込んでしまう。みんな中傷から滋養を得て、恥辱を食って太る。そして美德が誹謗の攻撃に強く耐えているのを見ると、ああ、策をめぐらして破滅させようとする！ そして自分たちが負けると、憎悪の毒で心を病み、立派な人物が安らかに眠る墓碑を、冷たい大理石が熱して溶けるまでたたく。

フィラスター登場。

フィラスター ご機嫌麗しゅう、最愛の姫君。  
 アレスーザ ああ、私の大切な人、私の心は乱れています。  
 フィラスター そのお目に涙を流させる者はきっと、普通の人間ではない。あなたの心乱れる理由は何なのでしょう？  
 私はあなたの奴隷で、善良なあなたにつながれている、今の私は、あなたが過去の私に新たな息吹を吹き込んで作り直したもの、だから私があるあなたの名誉を回復してさしあげよう。  
 アレスーザ ああ、愛するあなた、あの子が！  
 フィラスター あの子？  
 アレスーザ あなたが遣わしたきれいな小姓が――  
 フィラスター あれがどうかしましたか？  
 アレスーザ もう抱えておけないのです。  
 フィラスター なぜですか？  
 アレスーザ あの子は疑われています。  
 フィラスター 疑われている？ 誰が疑っているのですか？  
 アレスーザ 国王です。  
 フィラスター ああ、わが悲運！  
 では、見当違いの疑念ではないのだ。[アレスーザに] 小姓に暇を出しなさい。  
 アレスーザ まあ、ひどい！ あなたもそんなに冷酷なの？  
 私があなたをどれだけ愛しているかを、これから誰があなたに教えてくれるの？  
 誰があなたにそれを伝えて、私の送る涙を流してくれるの？  
 これから誰が手紙や指輪やブレスレットをあなたに届けてくれるの？  
 誰が身を粉にして尽くし、夜も眠らずあなたを称える話をしてくれるの？  
 誰があなたの嘆きの歌を泣きながら歌ってくれるの？ それを聴けば、心を持たない絵でも悲しみの魂を吹き込まれて嘆くでしょう。  
 誰がリュートを手に取って弾いてくれるの、私が瞼を閉じて静かに眠り夢を見て、「ああ、私のあなた、愛するフィラスター」と叫ぶまで？

フィラスター [傍白] ああ、なんということだ！

このご婦人が貞女ではないと教えてくれた男が  
この胸を引き裂いてくれればよかったのだ。

姫、あの子はお忘れなさい。

ずっといい小姓を見つけてさしあげよう。

アレスーザ いえ、絶対にだめです、私のペラーリオのような  
いい子は他におりません。

フィラスター それはあなたの愚かな愛情にすぎない。

アレスーザ ペラーリオ、お前といっしょに、召使に対する信頼も

永遠におさらばです。忠誠心も、みずから進んで立派に行動したいという願いも  
何もかもおさらばです。お前が受けた不当な仕打ちゆえに、

お前のあとを継ぐ召使はみんな純潔の愛を売り渡し、裏切ればよいのです。

フィラスター 一人の少年のためにこんなに感情が高ぶるのか？

アレスーザ あの子はあなたの小姓だった、あなたが私に遣わした。

そんな人を失うのです、嘆かずにはおれません。

フィラスター なんという忘れっぽい女だ！

アレスーザ え、今なんと仰いました？

フィラスター 不実のアレスーザ！

おれは正気を失っている。お前はおれを正気に戻してくれる薬を持っているか？  
持っていなければ、喋るのをやめて、こうせよ。

アレスーザ 何をするの？あなた、眠りたいの？

フィラスター 永遠に眠るのだ、アレスーザ。ああ神々よ、

私に強い忍耐力を与えたまえ！おれは裸同然で、一人で

多くの運命の衝撃に耐えてきたではないか？無数の強大な災いが

海のように自分に押し寄せてくるのを見てきたではないか？

死神のように恐ろしい危険を懐に抱いて、それをものともせず

ただの笑いの種にして、放ってしまったではないか？

おれはこれから、この暴君のもとで生き続けねばならぬのか、

憔悴し、自分の弔いの鐘を聞き、自分の死を嘆く人々を思い浮かべながら？

これらすべてに立派に耐えて、そして女の裏切りに

完全に頼れてしまわねばならないのか？ああ、あの小僧、

忌々しい小僧め！よりによってあの悪党の小僧を相手に

情欲を満たしたのか？

アレスーザ 違います、それなら私は裏切られたのです。

私を破滅させる謀略がめぐらされているのが分かります。

ああ、みじめな私。

フィラスター さあ、この哀れな国に対して私が所有する

ささやかな権利をお前に譲ろう。それをあいつに与えるがよい、

お前を楽しませてくれるのだから。おれはどこか遠隔の地を探さねばならぬ。

女は自分の毒で膨張して破裂するのを恐れて足を踏み入れないその地で、

お前を呪って生きよう。

そこに穴を掘って住み、鳥や獣たちに女とは何かを教えて、動物たちがお前の餌食にならぬよう助けてやるのだ。

お前の目には天上の美しさが見える、しかし心は地獄よりもどす黒く忌まわしい。お前の言葉はサソリのように薬にも毒にもなる。お前の思いは巧妙なおびただし気まぐれと織り合わされて精妙な織物となって、お前を包んでいる。

女の表情の語る物語を読み、それを真実だと信じて死ぬ愚かな男は永遠に破滅だ。お前の美德はすべて、影にすぎない、

朝の間は残っているが、夜には消え失せ

過去のものとして忘れ去られる。誓いは霜のようで、

夜の間は固く凍っているが、太陽が昇ると溶けて消えてしまう。

とどのつまり、お前はひどい混沌で、おぞましい無秩序だ、愛の神でも女の気まぐれは見分けられぬ。おれは最期の一瞬までこんな嘆かわしいお前の話を語らねばならぬ。

おれの悲しみも喜びもすべて、さらばだ。(退場)

アレスーザ 神様、お慈悲です、私を殺してください。

なぜ私はこのような目に会わねばならないのですか？

私の胸を水晶のように透明にしてください、そうすれば

私を疑う世の人々も、私の心に汚らわしい思いは少しもないと

知るでしょう。女はいったいどこを探せば

心変わりをしない人を見つけることができるのでしょうか？

ベラーリオ登場。

ああ神様、あの子が今ではひどく腹黒い悪人に見えます！

[ベラーリオに] ああ、とんだ食わせ者、お前は揺りかごの中にいて

おしゃべりもできないときから不実だった。お前は嘘をつき、

無垢な人間を裏切るためによこされたのだ。お前の主人とお前は

情熱に愚弄された乙女を葬り去り勝ち誇ればよかろう。しかし

お前たちが征服して得たのは、偉大なものは何もなく邪悪だ。

すぐに消えてしまうがよい。お前が恥を知るならば、

私の命令で追い出されなくても自分から出て行くだらう。

お前がどんなにおぞましい仕事をしたか分かっていれば、

ああ、山を幾重にも積み重ねてその下に隠れてしまいたいと思うだろう、

人に掘り返されて見つからないように。

ベラーリオ ああ、どんな神様が人間に憤り、

この上なく気高い方々をこの異様な病に

かからせてしまったのか？ 王女様、あなた様が私に加えられる

この悲しみは、海に数滴の雫を垂らすようなものです、

私の悲しみはすでに大きく、これ以上膨らみようがございません。  
 わが主人は怒りで私の胸を貫いてしまわれました。  
 そのため未来の喜びへの希望はすべて失せてしまいました。  
 私に消えろとご命令なさる必要はございません。私が伺いましたのは、  
 お別れをするため、最後の暇乞いのためです。今生のお別れでございます。  
 [傍白] 正直なところ、王女様のような方から、  
 盗みをはたらくか何か過ちを犯した子どものように逃げ去ることはできない。  
 [アレスーザに] あなた様の苦しみに神々のお力の加護がありますように。  
 時がすみやかに、あなた様と私の欺かれたご主人様に、  
 真実を明かしてくれますように。そうすればフィラスター様は  
 あなた様の真価がお分かりになるでしょう。一方、私は  
 どこか誰も知らない場所を探して死にます。(ベラーリオ退場)  
 アレスーザ お前に平安が訪れますように！お前は私を破滅させてしまった。  
 私がトロイの王妃だとすれば、  
 お前は無垢の表情で人を欺く悪党なのだ。  
 私はまたお前の口車に乗せられてトロイを失い、  
 裸で乱れた髪のまま放り出されて、  
 燃えさかる街を駆けることになるだろう。

侍女登場。

侍女 お嬢様、国王陛下は狩りに出るおつもりです、  
 あなた様をしきりにお呼びになっております。  
 アレスーザ 私もちょうど狩りに出かけた気分だわ。  
 ダイアナよ、あなたが男と同じように乙女に対しても怒るのであれば、  
 私にあなたの水浴を目撃させて、私を怯える鹿に変えてください、  
 そうして私は獐猛な犬たちに襲われて死に、  
 傷口が私の物語を語ってくれるでしょう。(退場)

#### 4幕1場

国王、ファラモンド、アレスーザ、ガラティア、メグラ、ディオーン、クレアモント、スラサライ  
 ン、従者たち登場。

国王 おい、猟犬と獵犬係はみんな先に行っているのか？  
 馬の準備はできたか、弓張りはすんでいるのか？  
 ディオン 万事ととのっております。  
 国王 [ファラモンドに] 気分がすぐれないようすな、殿下。  
 さ、あなたの些細な過ちは忘れてしまいましたよ。くよくよと

気にやむのはおやめなさい。それを口外できる者はここにはおりません。

ディオーン スペインの殿下は、雌馬をたらふく食った後の種馬のように鈍重で眠そうにしておられる。ほら、気落ちしておられるぞ。あの女が放った弾丸が急所に命中したのだ。そのまま往生してほしい。

スラサライン 殿下には狩りを教える必要はない。あいつは獲物を確実にしとめる。その最大の欠点は、いかがわしい場所で不法に狩りをするのがお好きだということだ。密猟をやめてくれたらよいのだが。

ディオーン 狩りの角笛は遅くまで寝ていた部屋に置き忘れてしまって、精気を失っておられる。

ああ、ご立派な嗅覚鋭敏の猟犬だ。あいつを放ってご婦人の跡を追わせよう。獲物を逃したら革ひもで縛り首にすればよい。私の狐狩り用の雌犬の別嬪さんに盛りがついたら、あの男を借りるとしよう。

国王 小姓は追い出したのか？

アレスーザ 父上が命じられたのです。私はご命令に従いました。

国王 結構だ。他にも言っておきたいことがある。〔二人は一同から離れて話す〕

クレアモント あの男が悔い改めるなんてあるだろうか？ 悔い改めるのはあいつにとって高潔ではないのだろうと思う。しかし苦行者のような風貌だぞ。まるで信仰修養書を口にくわえているようだ。身分の低いものがあいつと同じ罪を犯していたならば、血を流すにはよくない時期であろうとも、すぐさま刑を加えられて肝臓の閉塞部に穴を開けられ、犬鞭で瀉血させられていただろう。

ディオーン ほら、見ろ、あそこのご婦人は見た目にはお淑やかそのもので、隣人といっしょに教会で産後のお礼参りをしてきたみたいだ。あの顔から男好きの悪女だと誰が思うだろうか？ 貞淑にしか見えない。

スラサライン たしかに、とりたてて言うほどの重大事ではないというわけだ。目は愚直に星のようにきらめいているが、星形は格下の紋章の図柄で、自分の家柄を貶めてしまう。しかしそれに気づくのは、抜け目ない紋章官だけだろう。

ディオーン 見ろ、好き者たちが集結しているぞ！ ああ、盛りのついた軍団だ、悪魔が軍旗を掲げ、その母親が鼓手長だ。現世の肉欲まみれの連中が軍用行李をかついで後からやってくる。

クレアモント あのご婦人が本人の望まぬ好待遇を受けたのは間違いない。以前は、あの女は巷の噂の種だった。今は、あいつは媚薬で発情するなんて言えるやつは一人もいない。あの顔は令状のようだ。みんな命令に従うので、意のままに世評を操ることができる。ご自身が男遊びをしようと思うときには、世間の口を縛りあげて塞いでしまう。ほんとうにあの女は上等な庇護を手に入れたよ、やんごとないお方から。それで自分の体を慎重に健康のために使えるというわけだ、毎週一回、四旬節と盛夏の時期は除くが。ああ、国王の庇護が金で買えるなら、金持ちの市民は勅許状のためにいくらでも大金を出すだろう！

国王 馬に乗れ、乗馬だ。みんな、ぐずぐずしていると日が高くなってしまふぞ。(退場)

## 4幕2場

2人の獵犬係登場。

獵犬係1 おい、鹿を追い込んだか？

獵犬係2 ああ、あとは弓を射るだけだ。

獵犬係1 誰が射るのだ？

獵犬係2 お姫様だ。

獵犬係1 いや、あの人はご自分で獲物を追いかける。

獵犬係2 隠れ場所から獲物を射るんだよ。

獵犬係1 他には誰が？

獵犬係2 もちろん、異国の若殿がおられる。

獵犬係1 あの男にはおもちゃの石弓を引いてもらって構わないよ。海の向こうからやってきた殿下がおれは嫌いだ。あいつは10シリングのチップをやりたくなかったの、獲物の脂肪の検分をしなかった。殿下は鹿を仕留めたところにいたのだが、太っ腹であられるからグロート銀貨（4ペンス銀貨）を10枚も出して、鹿の睾丸を強く所望されたのだ。おまけにあいつの執事が雄鹿の頭を欲しがった、鹿角の和毛（にこげ）で自分の帽子を飾りたかったのだ。殿下はきっと狩りが大好きなんだと思う。あの色男の騎士トリストラムというわけさ。なぜかと言うと、覚えているだろう、あいつは草地で乳を飲ませている牝鹿を見つけると、牡鹿を捨てて雌を襲い、目を射抜いて仕留めたのだ。他に射るやつは？

獵犬係2 ガラティア様だ。

獵犬係1 あれはいい女だ、草むらであいつの侍女を転がしたからといって怒ったりしなければな。あいつは気前がいい。それに神かけて貞淑なのだそうだ。それが欠点であろうがなかるうがおれの知ったことじゃないがね。それでみんなか？

獵犬係2 いや、もう一人、メグラがいる。

獵犬係1 あれはお盛んな女だよ。獵犬たちの後から、狩りの馬鞍のように固い尻を乗り回す。家に戻ったら、尻に湿布して撫でてもらえば、また万事順調というわけだ。あの女は午後三回行方不明になった——森はあれをやるのに都合がよかったというものもあるが。男一人であの女を見つけて相手にするのは大仕事で、汗をかかされたよ。あいつは男を乗り回すのもうまいが、金離れもいい。しっ、聞こえるぞ——おれたちも行こう。（退場）

## 4幕3場

フィラスター登場。

フィラスター ああ、この森で山羊の乳やドングリで育ち

王権も女の容色という偽りの手管も知らなければよかった。

洞穴を掘り、そこにこの身と私の炉と持ち物全部と寝床をおさめて住処とし、

それから山の娘を伴侶とすればよかった。

娘は厳しい自然にさらされ容貌はくたびれているが、  
 その操は娘が住んでいる岩山のように堅固だ。  
 娘は私の寝床に木の葉と葦をまき、山の隣人つまり獣の皮をしいてくれる、  
 その豊かな胸にはわたしの大きな田舎びた子どもたちを  
 抱いていたかもしれない。これが苦悩のない人生であっただろう。

ベラーリオ登場。

ベラーリオ ああ、邪まな人間よ！無垢の人は獣たちの中なら歩いて大丈夫だ。  
 ここでは私を襲うものはいない。あれは——私の主人が嘆き悲しんで座っておられる、  
 まるで魂が身体から出る道筋を探しているかのようだ。  
 [フィラスターに] あなた様の先のご命令に背く私をお許してください。  
 どうしても聞いていただきたいことがございます。  
 悲嘆にくれるあなた様であれば私を哀れんでくださるでしょう。  
 お聞きください、殿下。  
 フィラスター おれが哀れむことができるほど不幸な人間が  
 この世にいるというのか？  
 ベラーリオ ああ、私の立派なご主人様、  
 あなた様の寛大なお心におすがりします、  
 私の異様な運命をご覧になり、なにか食べ物をお恵みください。  
 殿下のご厚意にあずかれるような奉公を私はしておりませんが、  
 寒さと飢えを凌ぎこのか細い命をつなぐことができれば  
 十分でございます。  
 フィラスター お前か？消えろ。  
 行け、お前が身に着けている不相応なその服を売り、  
 それで食い物を買えばいい。  
 ベラーリオ ああ、ご主人様、この服では何ももらえません。  
 何も知らない田舎の人たちは、こんな華やかなものに触れるのは  
 反逆だと思っています。  
 フィラスター ああ、ほんとうにこれは薄情な仕打ちだ、  
 お前を見せて私を苦しめるとは。お前はまた詐欺の商売を始めたのか？  
 どのようにしておれをまた騙そうと考えているのだ？  
 まだおれに試していない責め苦が残っているのか？  
 お前を召し抱えた時、お前は今と同じように泣き、  
 そのような表情をし、同じように話した。あの時、お前に会わねばよかった！  
 人の心を動かすその涙が他の人間にも効くのであれば、  
 その手管を使うがいい。おれは黙って見過ごしてやろう。  
 お前はどっちに行くつもりだ？おれはもうお前を見たくない。  
 お前の目はおれの目には毒だ、おれは怒り狂いたくないからな。  
 こっちか、それともあっちか？

ベラーリオ どちらでもよろしゅうございます。

私は自分の墓に通じる道を辿るつもりでございます。(フィラスターとベラーリオ別々に退場)

#### 4幕4場

ディオオンと獵犬係登場。

ディオオン これは全く不思議な思いがけないことだ！ おい、獵犬係。

獵犬係1 はい、ディオオン様。

ディオオン ご婦人がこちらへ来るのを見なかったか、額に白斑をもつ黒い馬に乗っていたはずだが？

獵犬係2 若い背の高いご婦人ではございませんか？

ディオオン そうだ。森の方へ行ったか、それとも草原の方か？

獵犬係2 実は、誰も見ておりません。(獵犬係退場)

クレアモント登場。

ディオオン くそつたれ、それならなぜ聞いたのだ！ どうだ、姫は見つかったか？

クレアモント いや、見つからないと思うぞ。

ディオオン 王は自分で娘を探したらいい。姫がちょっと自然の用を足すためになくなったからといって、全宮廷が剣を手に出動するほどの事態ではあるまい。その用がすめば、騒ぎは収まる。

クレアモント 出所は分からぬがすでにいろんな噂が流れている。馬が姫を乗せたまま走り去ったという者もいれば、姫は狼に追われていたという者もある。姫を殺害する企てがあって、武装した一団が森で目撃されたという者もある。しかし、姫が自分からすすんで馬で走り去ったのは疑いない。

国王とスラサライン登場。

国王 姫はどこだ？

クレアモント 分かりません、陛下。

国王 何だと？ もう一度言ってみよ。

クレアモント 陛下、私に嘘をつけと仰せでしょうか？

国王 そうだ、そのような返事をするよりは、嘘をついて地獄へ墮ちるがいい。

もう一度聞く、姫はどこにいる？ はっきりと言え。

[ディオオンに] では、お前に聞く、姫はどこだ？

ディオオン 存じません、陛下。

国王 もう一度そのような不遜な返答をしてみよ。天に誓って、

それがお前の最期だ。お前たち、答えよ、

姫はどこだ？ いいかみんな、おれはお前たちの王だ、

おれは娘に会いたいのだ、娘に会わせろ！



お前たちみんなに命ずる、お前たちは私の家来だ、  
娘に会わせろ！ おれはお前たちの王ではないのか？  
それなのに、おれの命令に従わぬと言うのか？

ディオーン もちろん従います、私たちに実行可能な真っ当なご命令であれば。

国王 実行可能で真っ当な命令だと？ いいかよく聞け、  
裏切者め、お前は、王は実行可能で真っ当なことだけやればよいと言うのか？  
娘を連れてこい！ さもないと、この命にかけて、  
シシリー全土を血の海にしてやる！

ディオーン ほんとうです、お連れできません、陛下が姫君の居所を教えて下さらなければ。

国王 お前たちはおれを裏切った、おれの人生の宝を奪ったのだ。  
さあ、娘を連れてこい、ここでおれの前に立たせよ。そうせよと  
王が命じているのだ。王がひとたび命じれば、風は鎮まり、  
太陽を覆う雲は散り、大波の海原は凪ぎ、  
大洪水は収まる。答えろ、そうではないのか？

ディオーン いいえ、違います。

国王 違うだと？ 王の言葉にそんな力はないと言うのか？

ディオーン ええ、そうです。ひとたび肺が腐ってしまえば、  
吐く息も香しい匂いを失ってしまいます。

国王 何だと？ 口のきき方に気をつけろ。

ディオーン 陛下、お気をつけください、あなた様は公正な神々を  
侮っておられます。

国王 ああ、王とは何なのだ？

神々よ、あなた方は王を他の人間より高い地位につける。  
王はかしずかれ、へつらわれ、崇められて、神々の雷が  
自分の掌中にあるのだと思うようになる。しかしその力をいざ試してみると、  
王がいくら威圧しても木の葉一枚揺らせぬ。  
おれが罪を犯したのは確かだ、そしていま罰を受けようとしている。  
しかしこんな罰を受けたくはない。その方法はおれに選ばせて、  
そして厳しく罰してほしい。

ディオーン [傍白] 王は、神々と法律契約の交渉をしているぞ。誰かに王と神々の契約履行の約定書  
を書いてもらいたいものだ。

ファラモンド、ガラティア、メグラ登場。

国王 どうだ、姫は見つかったか？

ファラモンド いえ、馬は見つかりました。

空馬で走っておりました。何か謀反の企みがあるのです。

ガラティア、お前は姫と一緒に馬で森に入って行った。

なぜ姫を置き去りにしたのだ？

ガラティア そうせよと姫がお命じになったからでございます。

国王 命じただと！ 姫を置いてきてはいけなかったのだ。

ガラティア 私の地位と家柄からしまして、

お嬢様のご命令に従わないというのは無理でございました。

国王 お前たちはみんな狡猾だ、命令に従うのは私に害が及ぶと分かっているときだけだ。

しかし何としても娘を見つけずにはおかぬ。

ファラモンド 娘が見つからなければ、

この手にかけて、シシリーは消えてなくなるだろう！

ディオンの [傍白] え、殿下はシシリーをポケットに入れてスペインへ持って行くつもりなのか？

ファラモンド 一人も生かしてはおかぬ、ただし国王と料理人と仕立屋は別だが。

ディオンの [傍白] でも、殿下と寝てくれるご婦人の命は助けたほうがいいでしょう。どっさり子どもを産んでもらうために困っておけますよ。

国王 [傍白] なるほど、おれは自分が犯した悪事の報いを受けねばならぬのだ。

ディオンの 陛下、こんなことをしては、娘を見つけることはできません。

国王 みんな急げ、手分けして捜せ。娘を、あるいは——もし娘が殺害されたのであれば——逆賊を見つけた者は、大いに取り立ててやる。

ディオンの [傍白] おれは知っている、娘を見つけたら5,000ポンドくれるやつがいるぞ。

ファラモンド さあ、捜そう。

国王 めいめい散って探せ。こっちはおれが探す。

ディオンの さあ、みんな、われわれはこっちだ。

クレアモント お嬢さん、あなたも探しに行くんですよ。

メグラ 私は探すより探してもらいたい、いえ、まさぐってもらいたいわ。 (一同退場)